

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (学 術) Doctor of Philosophy	氏名 (Candidate Name)	李 芸
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 日中戦争期における中国共産党根拠地の労働英雄運動 —陝甘寧辺区・晋西北根拠地・太岳根拠地の比較を中心に—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教 授	丸田 孝志	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	水羽 信男	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	永山 博之	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教 授	三品 英憲(和歌山大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>李芸の博士論文は、日中戦争時期の中国共産党（中共）根拠地における労働英雄運動について、中共中央所在地の陝甘寧辺区と前線の晋西北根拠地、太岳根拠地などを対象に比較を行ない、同運動の全体像の解明を試みたものである。従来の研究では、1943年の大生産運動が毛沢東の提唱によることから、労働英雄運動が陝甘寧辺区から始まり、各根拠地へ拡大したことが前提とされていたが、同論文は、陝甘寧辺区および前線の各根拠地の労働英雄運動の実態を1943年以前に遡り、新聞史料、公刊された史料集などを用いて、実証的に研究することで、各根拠地の運動の特徴と根拠地相互の運動の連関について明らかにしたことに研究の独創性がある。</p> <p>序論では、本論文の問題関心、対象となる各根拠地の説明、労働英雄運動に関する先行研究と本論文の研究視角について述べられる。第1章では、陝甘寧と晋西北の労働英雄運動の比較を行い、全区規模の大会の開催、英雄の序列化、民衆による英雄の選抜、民俗利用などの陝甘寧の運動の形式が、1940年から晋西北で実践されていたことを明らかにした。晋西北では陝甘寧の新型富農の提唱と比べて貧農の模範が多数を占め、「労働と武力の結合」に力点が置かれた。また、両根拠地の交流の状況から、晋西北の経験が隣接の陝甘寧に影響を与えた可能性が指摘された。</p> <p>第2章では、陝甘寧と太岳の労働英雄運動の比較を行い、太岳では日本軍の侵攻に対抗して、1940年から女性や児童の英雄顕彰が行われ、1941年からは戦闘英雄（民兵）の顕彰も行われるようになった。また、兵士の家族、傷痍軍人といった革命の模範、弱者の模範が労働英雄としても顕彰されたこと、このような動員手法が、女性や兵士の家族、傷痍軍人などの労働力を積極的に組織動員する中華人民共和国の模範顕彰に継承されていったことなどが明らかにされた。</p> <p>第3章では、工業部分におけるソ連のスタハノフ運動と陝甘寧の趙占魁運動との比較によって、整風運動の一環として展開した趙占魁運動が、物質奨励よりも公正無私の工作态度などの精神性を重視するものであったことを明らかにした。このような趙占魁運動の特徴も、共和国の模範顕彰に継承されていった。精神性をより重視する中共の模範顕彰の特徴は、先行研究が指摘するよりも早く延安整風運動期に現れており、この点はソ連の経験との比較によって明確に提示することができた。この他、軍事部門で晋西北、太行根拠地のような前線の根拠地の英雄顕彰が、軍事情勢を背景に陝甘寧よりも技術を重視していたことも指摘した。終章ではこれまでの議論をまとめた上で、労働英雄運動を通じて基層社会に創出された基層幹部が中共以外に権力の源泉をもたなかったため、国共内戦期にかけて</p>			

社会に対する操作性が高まっていくことを展望した。

本論文は、延安を中心とした革命史叙述を修正するばかりでなく、各地域の個別実証研究の進展によって統一的な中共の革命像が解体し、階級闘争やナショナリズムなどの単一的な原理による中共の勝利の説明が不可能となった今日の研究状況において、新たな視角による中共史像を提示しようとする試みとして注目される。また、前線根拠地に着目することで、労働英雄運動の共和国の労働模範運動への継承について明らかにし、中国における戦時動員体制と社会変容に関する研究を実証面で前進させた他、ソ連の労働英雄運動との比較を通じて中国の労働英雄運動の特徴についても明らかにしており、中共史において未だ十分でないソ連との比較研究においても注目すべき成果を上げている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)